

法然における機教相應の意味

飯田真宏

はじめに

法然の浄土宗独立の背景には様々な要素が存在するが、本論文で注目したいのは諸宗の三学の仏道を機不相應として捉える見解である。つまり、法然は諸宗の仏教は機と教とが不相應故、人々が救われないと判断して新たに浄土宗を開いたのである。

そこで『選択集』『教相章』に引用される道綽『安樂集』の次の一文に注目したい。

一切衆生、皆有^ニ佛性^一、遠劫^{ヨリ}以來應^レ値^フ多佛^ニ。何^ニ因^テ至^ル今^ニ、仍^ラ自^ラ輪^ニ迴^シ生死^ニ不^レ出^デ火宅^一。

この問いは、悉有^ニ佛性^一と言われながらも苦しみ続ける衆生の声である。そして、人々を救うべきはずの仏教によっても、救われない人々が存在

法然における機教相應の意味

するという現実をも示すものである。この現実に応えるものこそ、機と教とが相應する浄土の教えに他ならない。では、機教相應とは、具体的に何を意味するのか。以下、法然が述べる意を明らかにしていきたい。

1

まず始めに、三学の仏道に対する法然の態度を見ておきたい。そもそも、仏教の基本は戒・定・慧の三学を修めて仏果菩提を得ることである。

『和語灯録』『諸人伝説の詞』にも、

およそ佛教おほしといへども、詮ずるところ戒・定・慧の三学をば
すぎず^②。

と述べられるように、法然自身も仏教における三学の重要性を述べる。

僧侶である以上、この三学を無視することはできない。しかし法然はここにわがごときは、すでに戒・定・慧の三學のうつは物にあらざると論ずる。三学を修めようとしても修められない、換言すれば、三学の仏道では救われることのない自己というものを法然は見出したのである。その悲しみは非常に大きなものであり、『和語灯録』「諸人伝説の詞」において、

しかるにわがこの身は、戒行において一戒をもたもたず、禪定において一もこれをえず、智慧をいいて斷惑證果の正智をえず、……惡業煩惱のきずなをたゞずば、なんぞ生死繫縛の身を解脱する事をえんや。かなしきかなかなしきかな、いかゞせんいかゞせん^①。

と述べられることから法然の苦しみは明らかとなる。

この現実が明らかになったからこそ、『觀經疏』「散善義」の「一心專念彌陀名號^②、行住坐臥、不問時節久近^③、念念不捨捨者^④、是名三正定之業^⑤。順^⑥彼佛願^⑦故」の一文に出会い、三学とは異なる仏道に回心したのである。つまり、「教相章」の始めに引かれる『安樂集』の引用文は、法然が真摯に受け止めた現実でもある。

この仏教の三学に出会いながらも救われないういう現実が、浄土教を依り所とする先学達により、新たな道を見出させた。そして、三学の仏教の立場とは異なる教判を明らかに示すのである。

法然も「教相章」で引くように、諸宗の教相判釈は様々である。ただ、それらの教判に共通して言えるのは、教えの浅深を基準に、教法が体系

的に分けられているということである。これは、より深き教えを聞いて智慧を得ることを目的とする仏道を考えれば、当然必要となる判釈である。一方、法然が依り所とする道綽の聖道・浄土の二門判は、それらの教判とは異なる立場よりなされる。

まず聖道門について、法然はこの教えを、

於^⑧此娑婆世界之中^⑨、修^⑩四乘道^⑪、得^⑫四乘果^⑬。四乘者、三乘之外^⑭加^⑮佛乘^⑯。

と押さえる。およそ三学を重んじない宗は無い。天台宗であろうと、法相宗であろうと、もしくは小乗であっても、此土において三学を修め、智慧を得ることを目的とする。しかし、それらの教えは「三学非器」と法然が示すように、修めることが困難なものである。それにより、修められない者達が救われないういう現実が生ずる。

この聖道門とは異なり、『大經』『觀經』『阿彌陀經』『浄土論』の三經一論、つまり如来の本願を依り所とし、浄土往生を目的とする教えが浄土門である。法然がこの浄土門の教えに帰依したことは言うまでもないことであるが、ここで触れておきたいのが、法然が浄土門に帰依した理由となる弥陀の本願の意である。これについては「本願章」の一文に見られるので引用したい。

然^⑰則^⑱爲^⑲令^⑳一切衆生^㉑平等^㉒往生^㉓、捨^㉔難^㉕取^㉖、易^㉗爲^㉘本願^㉙。願^㉚歟。……然^㉛則^㉜彌陀如來、法藏比丘之昔、被^㉝催^㉞平等慈悲^㉟、普^㊱爲^㊲攝^㊳於^㊴一切^㊵下^㊶以^㊷造像起塔等^㊸諸行^㊹爲^㊺往生^㊻本願^㊼、

唯以三種名念佛、一行、爲其本願也⁽⁸⁾。

法然が受け取った弥陀の本願の意は、一切衆生の平等なる浄土往生である。慈悲の働き故に、本願には行者が三学を修める必要性を説かない。このように、三学が修められない全ての人々が救われる仏道が、聖道門の歩みとは大きく異なる浄土門であり、法然の浄土宗なのである。

続けて、「教相章」に引かれる曇鸞が明らかにした難行道・易行道の教判を見たい。法然も「教相章」において会通をしているように、この難行道・易行道は二門判と深く関わるものである。香月院深励の見解を参考にすれば、二門判は至仏果（聖道門）と往生浄土（浄土門）という果に約する教判であり、二道判は因位に約する教判として位置付けられる。

まず難行道であるが、これは聖道門と同じく三学を修めていく仏道である。この道が難行と言われる理由には時機の問題が大きく関わるが、その詳細については後に考察することとし、今は難行の義意を明かす、唯是自力、無他力持⁽⁹⁾。

という一文に留意しつつ、易行道に移りたい。易行道において、易行道者、謂但以二信佛、因縁願生⁽¹⁰⁾、淨土。乘佛願力、便得往生、彼清淨土。佛力住持、即入大乘正定之聚⁽¹¹⁾。

つまり、聖道門、難行道と言われる三学の仏道は、自身の精進により、智慧を修めていくものである。宗派によってその道を歩む際の依り所と

法然における機教相應の意味

なる經典に違いはあっても、目指すべき頂上が異なるということはない。法然は比叡山において天台教学だけでなく、南都諸宗の仏教をも学び、その頂上を目指して精進した。しかし、その結果法然が体得した所は、己の力でその道を歩み頂上に辿り着くことはできないという、三学非器の自覚であった。

他方、浄土門、易行道は弥陀の本願を依り所とする仏道である。その本願が一切衆生の平等なる往生を願うものであることにより、浄土門においては三学を修めたか否かという行者の質によって救いが限定されることはない。重要となるのは、その本願の働きを信ずることができるか、ということなのである。

『選択集』の標宗において、「往生之業念仏爲本」と浄土往生の本を念仏で押さえる法然ではあるが、弥陀の本願への信心が軽視されることはない。例えば、「三心章」の標章には、

念佛行者、必可三具足三心之文⁽¹²⁾

と念仏には必ず三心を具足することを述べている。また同じく「三心章」に、

當ニ知ル、生死之家、以疑爲三所止、涅槃之城、以信爲三能入⁽¹³⁾。と示す一文は、弥陀の本願への信心によって開かれる浄土門の仏道を示すものに他ならない。この信心による往生が、智慧などによって限定されない、平等なる救いの道であることは、これまでの考察などによって限定さ

さて、以上の教判を総合的にまとめるならば、これは仏道の主体の相

違として押さえることができる。まず道綽や法然によって廃された聖道門であるが、これは自身の精進によって得た智慧によって仏道を歩むものである。換言するならば、行者自身が主体となって修した智慧を依り所とすることにより、本人の修学が常に問われる道となる。

一方で、法然などが依り所とした浄土門の教えは、弥陀の本願の働きによって往生という救済を受ける道である。換言すれば、その主体は本願を興した如来であり、行者は救済の対象に他ならない。それ故、行者に求められるものは智慧や才覚ではなく、ただ信心のみとなる。

『選択集』においては、「教相章」における引用文以外に自力・他力について触れられることはない。しかし、この自力・他力という視点から法然教学を考えることは必要不可欠である。事実、『法然上人御説法事』には、

念佛を申て往生を願人は、自力にて往生すべきにはあらず、たゞ他力の往生也。……唯一向に佛の願力をあおぎて往生おぼ決定すべきなり。わが自力の強弱をさだめて不定におもふべからず。¹⁵⁾

と、往生を述べる際に自力・他力について言及している。また、他の著作にも自力・他力は見られる。

つまり、『選択集』でよく見られる「彼の佛願に順ずる」などの、如来の本願の働きについて述べられる場合、自力・他力が示す仏道の主体の転換ということを意識せずに受け取るならば、法然教学の意を読み違えることにも繋がる。立教開宗の書である『選択集』において一貫して

示される仏道の主体の問題は、機教相応を考える際の要とも言えるものなのである。¹⁷⁾

2

聖道門と浄土門における仏道の主体の違いを明らかにした所で、法然の説く機教相応についての考察に移りたい。

まず聖道門の機教不相應について、「教相章」で引かれる『安樂集』の、

其ノ聖道ノ一種、今、時難シ證シ。一ニハ由去二大聖一遙遠上、一ニハ由理深解微¹⁸⁾ニ。

という一文、そして『浄土論註』の、

難行道者、謂於三五濁之世、於無佛時、求阿毘跋致爲難¹⁹⁾。という一文が重要となる。これらの文で示されるものは、教法に深く関わる時機の問題である。この時機の問題が、法然に浄土門の教を選ばせる上で大きな影響を与えたことは、「教相章」で引かれる二門判、二道判に留意すれば明らかである。

では聖道門の教えと不相応な機とは如何なるものか。更に言えば、法然は何を根拠として機を押さえたのか。注目したいのは、凡夫という見解である。法然は『念仏往生要義抄』において、

われらが器量はこの教におよばざるなり。そのゆえは、法花には苦

薩・聲聞を機とするゆへに、われら凡夫はかなふべからずとおも
べき也。⁽²⁰⁾

と、「われら」という視点から、法華經の教えも適わない、菩薩や声聞
などとは異なる機として、自身を含めた衆生を凡夫として了解している。
つまり、凡夫故に三学の仏道が不相應なのである。

この凡夫について、法然の見解を知る為にも善導の凡夫観に留意しな
がら考察を進めたい。『観經疏』「女義分」では、『観經』で説かれる九
品をどのように解釈するかの見解が見られる。普通に『観經』を読むな
らば、そこには九種類の人間の機が存在するとして押さえるべきである。
しかし、善導は、

又看^レ此^レ觀經^ノ定善^及三輩^{上下}ノ文意^ヲ、總^テ是佛^去レ^マヒテ世^ノ後^ノ五^ノ
濁^ノ凡夫^{ナリ}。但以^テ遇^フニ縁^ニ有^ル異^ヲ、致^ス令^ニ九品^{差別}一^何者^{ナリ}、
上品^ノ三人^是遇^レ、大^ニ凡夫[、]中品^ノ三人^是遇^レ、小^ニ凡夫[、]下品^ノ三
人^是遇^レ、惡^ニ凡夫^{ナリ}。

と、『観經』で説かれる九品の区分を凡夫という一つの機によって押さ
える。上品や下品ということは、縁によるものであり、そこに機の差は
無いとするのである。

このような見解は、『観念法門』にも説かれる。

凡夫^ノ機性^ニ有^リ其^ノ二種^一。一^ハ者善性^ノ人[、]二^ハ者惡性^ノ人^{ナリ}。

と述べられるように、善性と悪性の区分はあるものの、その根本は凡夫
という一つの視点から押さえられている。

法然における機教相應の意味

法然は、この意を受けて念仏往生を説いていく。例えば、『選択集』
「三輩章」では善導の凡夫観より、「依^レ此^ノ釋^ノ意^ニ三輩^俱云^フ念佛^{往生}
也[」]と述べ、

故^ニ知^シ、九品^ノ之行[、]唯^在念佛^ニ矣。⁽²¹⁾
と論ずる。

菩薩の階位から考えれば、菩薩や声聞などになれない者が凡夫として
位置付けられる。菩薩は菩薩の教えを依所とし、声聞は声聞の教えを依
所として浄土往生を考えていけば良い。しかし、菩薩などを含めた九品
の衆生を全て凡夫として押さえる見解、そして全ての衆生の往生行を念
仏とする視点を合わせて考えれば、法然が説く凡夫の意が通仏教の解釈
だけでは押さえきれないことが伺える。そこに説かれるものは、凡夫と
いう唯一つの機、そして念仏往生という唯一つの教えなのである。

機と法との関わりについて、『観經疏』「散善義」で述べられ、『選択
集』「三心章」に引用される深心釈に注目したい。まず機について、

決定^シ深信^ニ自身^ニ現^ニ是罪惡^{生死}ノ凡夫[、]曠劫^{ヨリ}已來[、]常^ニ没^シ常^ニ流^ニ
轉^シ、無^レ有^ニ出離^之緣^一。

と述べられる。ここに見出されるものは、生死に苦しむ自身の現実、そ
して出離の縁の無い凡夫という自覚である。善導や法然において、末法
五濁という時代を生きる自身を含めた衆生は、煩惱などに縛られる存在
でしかない。しかし注意しなければならないのは、唯、生死の苦しみか
ら出離できない(菩薩道を歩めない)から凡夫なのではない。煩惱が無

くならないという現状からのみ、自身を凡夫と押さえるのではない、ということである。

この深心は、機に対してのみ論ずるものではない。阿弥陀への深い信という、法の深信が伴って初めて成立するものであり、切り離すことはできないのである。機の深心の続きには、

決定^{シテ}深信^{下ズ}阿弥陀佛^ノ四十八願^ハ、攝受^{シテ}衆生^ヲ、無^ク疑^ハ無^ク慮^ハ、
乘^ニ彼^ノ願力^ニ、定^{シテ}得^ト往生^上。

と述べられている。つまり、自身が出離の縁の無い凡夫であることを深く信ずるということは、阿弥陀の本願に依る救済を深く信じなければ明らかになれないものである。また、一切衆生を救わんとする本願の働きを深く信ずることが、人間の機を凡夫という一つの立場より押さえる視点を開くのである。

二種深信で述べられる凡夫とは、時機の問題によって苦しみ続ける、救われない人間ではない。それらの問題に應えるために立てられた本願の救済の対象として明かされた機が凡夫であり、またそれは他力の仏道をも示すものとなるのである。

法然における三学非器や凡夫という認識は、菩薩の階位からの比較という視点からではなく、弥陀の本願という立場より押さえなければならぬものである。そして同時に、そのような凡夫こそが弥陀の救済の対象となるのである。

深心とは、ただの自己反省ではない。あくまで深く信ずる心なのであ

る。法然は「三心章」において、

次^ニ深心^ト者^ハ、謂^ク深信^ノ心^{ナリ}。當^ニ知^ル、生死^ノ之家^ニ、以^テ疑^ヲ爲^ス所^ト止^ト。涅槃^ノ之^ニ城^ニ、以^テ信^ヲ爲^ス能^入。故^ニ今^ニ建^立二種^ノ信心^ヲ、決^シ定^{スル}九品^ノ往生^ノ者也^ト。

と論ずる。三学を修めることが自身には不可能であると感じ、仏道の歩みを放棄するならば、それは怠慢以外の何ものでもない。しかし、法然においての三学非器とは、弥陀の本願の働きと出会うことによって明らかとなる凡夫という我が身を深く信ずることである。と同時に、それによって三学を離れた新しい救いの仏道を歩むことを示すものである。それ故に、弥陀の本願を信ずることを重んずるのである。

更に言うならば、たとえ菩提心を発した者であったとしても、弥陀の本願に依る仏道を歩む時には、その者は菩薩ではなく凡夫となる。聖道門を機教不相應と廢する背景には、このような弥陀の本願の働きと出会うことによって明らかにされた凡夫観が存在するのである。

3

以上の考察に留意して、法然が述べる機教相應の意を明らかにしたい。例えば、『法然上人御説法事』においては、

かの諸宗はいまのときにおいて機と教と相應せず、教はふかし機はあさし、教はひろくして機はせばきがゆへなり。……ちるさき器に、

大なるものをいゝがごとし。⁽²⁷⁾

と、真言や天台などの聖道門の仏道は理が深い教えであるとしながらも、今の時機には相応しないと法然は論ずる。その一方で、

浄土宗は、せばくしてあさし。……たゞこの浄土の一宗のみ、機と教と相應する法門なり。かるがゆへにこれを修せば、かならず成就するべきなり。しかればすなわちかの不相應の教においへは、いたはしく身心をついやすことなかれ。たゞこの相應の法に歸してすみやかに生死をいづべきなり。⁽²⁸⁾

と、浄土宗を立てた根拠と共に、浄土宗に帰することを結論として述べている。

引用文中、天台などの諸宗の教が深いと論ずることからも分かるが、法然は教判によってそれらの教えそのものを否定するつもりはない。ただ、現実の機を考慮するならば、いくら深い教えを求めても智慧などが浅く不相応な故に、その教えによる救いが得られないまままで苦しみを繰り返してしまふということなのである。⁽²⁹⁾

諸宗の仏道の主体は行者自身である。菩提心を発すのも、智慧を得るのも、行者の精進によって左右される。それ故、聖道門の立場から言えば、機教不相應は精進によって克服すべきものなのである。深い法が理解できないならば、浅い教理から学べば良い。勝れた行が困難ならば、簡易な行から始めれば良い。他にも菩提心を発して菩薩となる努力をするなり、流転を繰り返す中で少しずつ三学を修めるなり、凡夫から脱す

法然における機教相応の意味

る方法はいくらでもある。

法然が機と教との相応を述べたのは、聖道門とは立場を全く異にするからである。機が凡夫という劣なるものであるから、それに相応する教えは簡易な称名念仏による往生しかない、ということではない。如何に簡易なものであろうと、それが行者自身の精進によって歩いていく道であるならば、そこに救いは無いと法然は見たのである。行者自身が問題となる道故に、如来が願う救いとは相応しないのである。

法然においては、弥陀の本願を依り所とする一切衆生が凡夫である。そして、弥陀が本願によって明らかにされる衆生の救いが、念仏往生の教えである。つまり、弥陀の本願を依り所とし、念仏往生を信ずる凡夫だからこそ、念仏往生という弥陀の教えが相応するのである。

また法然は別の言葉でも、この機と教との問題について述べている。

『三心料簡および御法語』において、
凡聖道門、極ニ智慧ヲ離ニ生死ヲ、浄土門、還ニ愚痴ニ生ニ極樂、……然ルニ入ニ浄土門ニ之日、不レ憑ニ智慧ニ、不レ護ニ戒行ニ、不レ調ニ心器ニ、只々無ニ甲斐ニ成ニ無智者ニ、憑ニ本願ヲ願ニ往生ニ也云々。⁽³⁰⁾

と論じられる一文に注目したい。ここで示される愚痴に還りて極樂に生まれるとされる浄土門とは、浄土門の教と相応する機の在り方を明かすものである。敢えて三学を否定し、智慧を依り所としない歩みを表すためにも、「還愚痴」と述べるのである。これは、三学や智慧を依り所として歩む聖道門の人々との違いを明確にするためにも、智慧という言葉

を用いて、浄土門を歩む者の智慧の在り方（その不要性）を明かしたのである。

以上からも明らかのように、智慧を依り所とする聖道門の歩みは、行者自身が問題となる故、一切衆生を救わんとする如来の本願と不相応となってしまう。同時に、不相応なるが故に、その仏道では救われない人々が生ずるのである。

法然が浄土宗立宗に際し、

我立^三浄土宗意趣者、爲^レ示^三凡夫往生報土^二也。⁽¹⁾

と、凡夫という立場からその意趣を論じていったのは、この機と教との相応によって全ての人々が救われる道を示さんがためである。凡夫とは、弥陀の本願を信ずることによって救われていく一切衆生である。その一切衆生が救われていく唯一の道が、一切衆生を救わんとする弥陀の本願の意によって開かれた念仏往生に他ならない。

おわりに

法然が依所とする他力の浄土門という歩みは、三学を依所とする聖道門仏教とは一線を引くものである。法然は比叡山において三学を修めながらも、善導の「一心専念弥陀名号^三」の一文に出会い念仏に帰した⁽²⁾。

道綽、善導の意を受け回心した法然には、もはや聖道門の仏道を歩むことはできなかつた。また、その必要性も無かつた。それ故に、全ての衆

生が救われる新たな道として立てられたものが浄土宗である。

これまでの考察に留意して述べるならば、機教相応の問題は、自力精進を必要としない本願に依る救いが明らかにされた時に解決したのである。

「教相章」で引かれる『安樂集』の一文には、

當今^ハ末法^ニ現^レ是^ニ五濁惡世^{ナリ}。唯^有淨土^一門^ニ、可^キ通^ス入^ス路^{ナリ}。

とある。積極的に換言すれば、聖道門の仏道が適わないから新たな道を探し、結果として浄土門の道に入ったということではない。機教相応した救いの道が明らかになったからこそ、三学の仏道を機教不相應の道と判ずることができたのである。浄土門の立が有ればこそ、聖道門の廃を決定的に論ずることができるのである。

註

- (1) 『真聖全』一・九二九（原文は『真聖全』一・四一〇）。
- (2) 『真聖全』四・六七九。
- (3) 『和語灯録』「諸人伝説の詞」（『真聖全』四・六八〇）。
- (4) 『真聖全』四・六八〇。
- (5) 『真聖全』一・五三八。
- (6) 『四十八卷伝』六卷（『法伝全』二四頁）。
- (7) 『真聖全』一・九三一。
- (8) 『真聖全』一・九四四〜九四五。
- (9) 「此^中難行道^{トイフ}者、即^チ是^レ聖道門也。易行道^{トイフ}者、即^チ是^レ淨土門也。難行・易行、聖道・淨土、其^レ言雖^モ異其意是同^シ」（『真聖全』一・九三二）と述べられている。
- (10) 香月院深励『選択集講義』（法蔵館）九四頁。

- (11) 『真聖全』一・九三二(原文は『真聖全』一・二七九)。
 (12) 『真聖全』一・九三二(原文は『真聖全』一・二七九)。
 (13) 『真聖全』一・九五七。
 (14) 『真聖全』一・九六七。
 (15) 『真聖全』四・一一一〜一一二。
 (16) 例えば、『浄土宗大意』(『真聖全』四・二二九)や、『浄土宗略抄』(『真聖全』四・六二二)などが挙げられる。
 (17) 仏道に関わる主体の問題について、神戸和麿「選択本願と三心」(『大谷学報』六八一)などを参照。
 (18) 『真聖全』一・九二九(原文は『真聖全』一・四一〇)。
 (19) 『真聖全』一・九三二(原文は『真聖全』一・二七九)。
 (20) 『真聖全』四・五九〇。
 (21) 『真聖全』一・四五三。
 (22) 『真聖全』一・九四八。
 (23) 『真聖全』一・九五一。
 (24) 『真聖全』一・五三四。
 (25) 『真聖全』一・五三四。
 (26) 『真聖全』一・九六七。
 (27) 『真聖全』四・五七。
 (28) 『真聖全』四・五七。
 (29) このような法然の見解は『西方指南抄』「念仏大意」にも見られる。
 (30) 『真聖全』四・二二二〜二二三を参照。
 (31) 『昭法全』四五一頁。
 (32) 『昭法全』四四〇頁。
 (33) 『四十八卷伝』卷六(『法伝全』二四頁)の記述。
 『真聖全』一・九二九(原文は『真聖全』一・四一〇)。

執筆者紹介

早島 有毅

(北海学園大学講師)

吉田 一彦

(客員所員 名古屋市立大学大学院教授)

塩谷 菊美

(神奈川県立茅ヶ崎高校教諭)

飯田 真宏

(特別研究員)

高橋 良政

(日本大学教授)

高橋 大樹

(仏教大学大学院博士後期課程)

鎌谷 かおる

(神戸女子大学非常勤講師)

郡山 志保

(神戸女子大学大学院博士後期課程)

同朋大学佛教文化研究所紀要 第二十九号

平成二十二年三月二十五日 印刷

平成二十二年三月三十一日 発行

名古屋市中村区稲葉地町七―一
編集者 同朋大学佛教文化研究所

所長 小島 惠昭

電話 ○五二―四一―一三三三

発行所 同朋大学佛教文化研究所
印刷所 株式会社 一誠社